

北海道文化財団叢書

長原スピリットを語る

TALK ABOUT THE NAGAHARA SPIRIT



長原スピリットを語る TALK ABOUT THE NAGAHARA SPIRIT

北海道文化財団叢書







長原スピリットを語る

発刊にあたって

孤立を恐れず

「ものづくり」の未来を求めた職人・長原 實

木工家具産業のトップとして比類なき指導力を発揮し、「旭川家具」を、日本はもとより世界屈指のブランドに育て上げた職人……。その長原 實さんが、2015年10月8日、私たちの元から静かに黄泉の世界へと旅立たれました。この北の大地と、「ものづくり」へのたぎる思いを、最後まで途切れさせることのない「見事な人生」でした。

風上に立つ

長原さんは、既存の権威におもねることなく、孤高と言ってもいい気高い志と洞察力で、時代のあるべき姿や方向を指し示しながら、行動し続けてきました。時には人知れず涙を流し、心折れそうになることもあったかもしれませんが、しかし、どんなに激しい風圧にさらされようとも、風上に立つことを恐れない人でした。それは、

「『一本木基金がスタートして嬉しいですね』そう語りかける私に、長原さんは、『ようやく間に合った！』と笑顔を見せてくれました。そして、声を出すことも切ない中、自らベッドに身を起こし、『ものづくり』に向かい、思いを、渾身の力で紙にしたためられたのです。」

この地に蓄積する財産としての（1）「織田コレクション」、（2）「IFDA国際家具デザインフェア旭川」、（3）「道立高等技専」、そして（4）「人づくり一本木基金」、その四つを有機的に運用し、この地域を「ものづくり王国」に、と記して、柔らかな表情で私の手を握り、手を合わせられたのです。込み上げてくるものがありました。あの合掌は、地域社会の中で生き抜いた長原さんが、市民に向けて、木工家具に生きる人に向けて、今を生きる心ある人に向けて手を合わせたものであるに違いありません。同席してくれていたカンディハウス社長の藤田哲也さんは、後日「あれは、長原さんの最後の仕事でしたね」と言われました。

長原さんが、80年の生涯をかけて、渾身の思いで伝えようとした「ものづくり王国」へ、という言葉は、行政機関の計画書が何万語を費やしても描き切ることの出来



公益財団法人
北海道文化財団

理事長

磯田 憲一

この北の地にあつて、常識という固定観念やしがらみの殻を打ち破り、新たな価値を生み出す先駆者であり続けることこそ、北海道の潜在力を、地域とそこに生きる人たちの「誇り」にまで高める道だと信じていたからでしょう。何より驚嘆させられるのは、木工家具の、産業としてのあるべき方向や、家具職人としてのありようを語るその理念は、ひとり木工家具の世界にとどまらず、人間社会の全てに通底する、時空を超えて心にしみる思想、哲学でもあったことです。

「ものづくり王国」へ

長原さんが旅立たれる僅か47時間前の2015年10月6日午後2時。退院され自宅に戻った長原さんは、ベッドの上で私の来訪を待っていてくださいました。

ない、この地域の進むべき方向性を端的に指し示す「魂の言葉」でした。晩年、精魂を傾けた「公立ものづくり大学」の開設は今なお霧の中です。しかし、この地の人々が、この地の持つ「希望」に向かって誠実に歩もうとするスピリットを持ちさえすれば、この地を「ものづくり王国」とすることは可能です。何より一人ひとりの心の中に、「内なる王国」を築くことは出来るはずだと私は信じます。

役割を果たし尽くした見事な人生

長原さんは、道半ばで倒れたわけではありません。想いの丈を語り、行動し、役割を果たし尽くしたと私は思うのです。後は、地域の人たちが、託された想いを担わなければなりません。「旭川に、北海道に、その決意ありや、なしや……」。私はそう問いかけ続けたいと思います。

80年の生涯を、信じる道を揺るぎなく、遅しく、地域と人に優しく、柔らかかに生き抜いた長原さん。
見事な人生……。本当にありがとうございました。

目次

「君の椅子」10年展 森で語る 連続講座	10
椅子という名の同伴者	13
椅子を創るデザイナーと職人	18
森―林―木を見る 木の個性と「一本技」	27
木材産業と工芸産業	38
20世紀型産業との訣別	40
「ものづくりを目ざす人たちを応援する」 人づくり―一本木基金 創設記念セミナー	74
桑原義彦氏からみた「長原實」という人間	52
織田憲嗣氏からみた「長原實」という人間	61
巻末資料	74



「私の仕事・

今、伝えていくこと」第5回

「君の椅子」10年展

森で語る〳連続講座〳バトンを未来へ〳

「と き」平成27年9月5日（土）

15時20分から

「ところ」札幌芸術の森

芸術の森センターレクチャー室

「講師」長原實氏

長原さんが、80年かけて紡いできた言葉をお聞きください。

〈磯田〉長原さんが無事に到着してくださいました。長原さんと私が遭遇したのは、もう14〳15年ほどになりますか、現在の上川総合振

はないか、それが北海道人の意地ではないか」という話をしたのが、10数年前でございます。その後、私が「君の椅子」プロジェクトを立ち上げた時も、長原さんに相談させていただきました。それ以来、長原さんは、私にとって精神的な支えでありました。

2年程前になりますか、長原さんが奥様と一緒に札幌の私のところへ来てくださり、「女房の生活費は残しておかなければならないが、それ以外は、自分が学ばせてもらったように、経済的な理由で学びができない若者に使ってほしい」と、自らの資産を私ども北海道文化財団に託したいと言ってくださいました。

長原さんは、旭川市役所、旭川家具工業協同組合ではなく、そして自ら創業した会社に創ってもいい基金を、文化財団へと申し出ら

興局、当時は上川支庁と言っておりましたが、そこに私がいた時に、長原さんとお会いしました。その時、非常に行動的な、しかも「言葉に勢いというか、魂がある方だな」と思いました。

その時に、こんなお話をしました。長原さんは20代の頃に西ドイツに留学されましたが、ヨーロッパで、刺身のような、食べなくなるような木肌の素晴らしい材を見て、「これはどこから来たのか」と尋ねたら、それは、北海道とかいうところの小樽から来たということを知り、ショックを受けられた。「オタルオーク」という名前で、ヨーロッパの高級家具はほとんどが北海道のミズナラだという話でした。

その頃、地方分権という言葉がありまして、「これから北海道のミズナラが津軽海峡を渡るときは、それに関税をかけた方がいいですね」という話を2人でした。「それこそが地方分権で

れました。そのことに深く感銘し、この基金の思いを、旭川だけではなく、北海道人の思いにしたいという気持ちで、2年がかりで創設しましたのが、「長原實・スチウレ・エング人づくり基金」であります。この基金名でありますけれど、長原さんは、自分の名前を冠にすることは必要ないとおっしゃいましたが、その精神を深く残していくために、正式名称は「長原實・スチウレ・エング人づくり基金」になっておりますが、愛称を「人づくり一本木基金」としました。長原さんは、長らくビジネスの世界で凄いことを築き上げた訳ですが、職人としての立場でいえば、一本一本の木に「おまえは何になりたいのか」と耳を傾け、その木が願っている家具をつくるのが、職人魂だとおっしゃいました。「森という木はない」ということで、私は、長原さんの思いを一本

一本の木に託して、「人づくり一本木基金」ということにした訳でございます。

長原さんは、健康状態を含めて、今、懸命にご努力をされていますが、長原さんの思いを込めた言葉を、北海道人として聞くべきだという思いで、この講座の最後に登場していただきました。札幌まで来ていただきましたので、是非、皆さんに、長原さんが80年かけて築き上げてきたお話を聞いていただきたいと思っています。



「君の椅子」10年展連続講座での長原實氏(左)と磯田憲一

椅子という名の同伴者

ただ今ご紹介いただきました長原と申します。こうして会場をお見受けしますと、ずいぶん顔見知りの方、長らくお会いしていなかった方にお会いできて、大変嬉しく思っている訳です。

磯田さんからお話があったように、私は今、健康が十分な状態ではありません。途中で少し咳き込んだりすることがあるかもしれませんが、お聞き苦しいことがあればお許しいただきたいと思っています。できるだけ立って話をさせていただきたいのですが、途中で座らせていただくかもしれません。立つというのは、こうしていると、皆さんお一人お一人の顔を拝見することになります。目が合うことになります。そういうことが、何かを伝えたいと思う者にとって、とても大切だと思うからです。

家族を思い、ふるさと思う。
同伴者としての「君の椅子」

今日ここで話しさせていただくことは、私のかかなり独断の思いがあるかもしれませんが、「君の椅子」プロジェクトについては、いろいろな方がお話しされたと思うので、私はあまり深入りしません。しかし、家具づくりをもう60年以上続けている者として、椅子には深い深いこだわりを持っているんです。

今日のレジュメに、椅子は同伴者だと書いています。まさに椅子は、いろんな場所さまざまな地位を表したりするんです。この「君の椅子」の特徴は、生まれた時から、君の椅子を与える、「これが君の居場所なんだよ」と、生まれた時から赤ちゃんに椅子との関わりを持ってもらう、これが素晴らしいですよ。人はみんな家庭の中でも、父親の席、母親の席、子ども

が何人かいればそれぞれの席が決まるものなんですね。食事の時、あるいは机に向かう時、いろいろなところで必ずそこに椅子があるんです。この、必ず椅子があるという歴史は、日本ではそんなに古くはないです。まだ半世紀くらいのことです。でも、今これだけ、日本人の暮らしの中に椅子は深く深く根づいたということなんです。そして、家長、家の中の長おさというか、家長の椅子というのは、日本ではまだ十分育っていないかもしれませんが、ヨーロッパではこれがあるんですね。いわばグランパの椅子です。こういうものは、だいたい100年あるいはそれのご家庭によつては200年も使い続けられている椅子があるんです。

そういう椅子がある一方で、歴史的に権力の象徴として椅子がつくられています。これももう、ずいぶん古い話で、中世の頃から、もっ

ぱら王様が各地に群雄割拠している時代、つまり戦国時代ですね。この時代にはみんな自分の権威を象徴するために職人を雇って椅子をつくらせました。それがライオンの脚であったり、ここに鷹が飛んでいるとか強い動物を象徴したものがあつたりして、あるいは、黄金を用いて権力を示したりしたこともあります。

こういうものから見ると、この「君の椅子」というのは、実に小さくてかわいい椅子なんです。そして、もしかしたら、この椅子がその人の一生の同伴者になるかもしれない。たぶんそうであろう。もしかすると、もう椅子としては使えなくなるかもしれない。人間はだんだん大きくなりますね。椅子はかわいいままです。でも、常にそこに、家族を思い、そこにふるさと感じる。そういうものとして、どこに引越しても持ち歩いてくれるんじゃないかという期待感があります。

私は今から5、6年前ですが、エーゲ海を旅しました。あそこに浮かぶいろいろな島の中に遺跡があります。オリンピック発祥の地もあります。そういうところでまず見かけたのは、椅子というよりは腰掛けと言いましょか。石の表面を少し平らにした石がずらりと並べられて、それが観覧席になっている。闘技場とか、そういうところに行くと、そういう椅子が何百と並べられている。まあ、それが家具の始まりであつたか、椅子の始まりであつたか。歴史的に見ると数千年前にさかのぼる訳ですから、椅子と人との関わりあいには文化として実に深いものがあるということを、つくづくと思う訳です。

「トリップトラップ」と「君の椅子」

日本で子ども用の椅子を市場で販売するようになったのは、あまり古くない話です。食

卓を囲むときの子ども用の椅子、皆さん家具に関わっている方はご存知の方が多いかもしれません。あるいは、お持ちになっている方もいるかもしれません。「トリップトラップ」という椅子があるんですね。L字型になって高さを調節できるようになった椅子です。これは推測ですが、私が知る限りでは、つくられたのは、今から約30年近く前だったかもしれません。ノルウェーでできた椅子なんです。当時、東京・銀座の松屋でバイヤーをなさっていた方がヨーロッパで見つけてきて、それを日本に紹介したというのが始まりだったと思います。とっても素晴らしい椅子なんですよ。使い勝手もいいし、ある程度、中学生あるいは高校生くらいまで使えるようなものになっていますね。この「トリップトラップ」は、ノルウェーの北の方のオーレンスンという町でつくられ

たんです。ここは北緯55度か60度くらいかな、正確ではないのですが。長年スウェーデンに住んでいらした中村さんが今日ここにいらつしやいますから、この辺のことは詳しいかもしれないませんが、私も16年ほど前にその町まで行ってまいりました。「トリップトラップ」をつくっている会社を訪ねて行っただけです。というのも、やはり子ども用の椅子として世界で売られている椅子がどこでつくられているのか、どのようなプロセスでつくられているのかを知りたくて、そこまで訪ねて行ったことがあるんです。

北緯55度くらいです。しかも6月に行きましたから、夜は暗くならない、白夜の町でした。とても印象深い町でした。人口は約10万人くらい、小さな町なんですね。そこに立派な家具工場がありまして、「トリップトラップ」を

つくっていました。この椅子が日本に紹介されると、瞬く間に国内のほとんどの家具屋さんで販売するようになりました。最初は松屋百貨店が独占的に販売していたのですが、それではもったいないからというんで、全国で売られるようになった訳です。今は、もちろん国産でもそのデザインの影響を受けたものや、全く別なオリジナルな子ども用の椅子はたくさん売られています。

しかし、やっぱりこの「君の椅子」というのは別格なんですね。その生い立ちといい、考え方がいい、決して量産しているものではない。ある地域で生まれた赤ちゃんの数だけつくる。それ以上はつくらないということですから、これは全くビジネスとしては考えられない世界です。



スチウレ・エング氏のデザインに改良を加えて販売した椅子「レントオム」

椅子を創るデザイナーと職人 (スチウレ・エングと私)

スチウレ・エングとの出会い

今日は椅子の話を中心にしたいと思うのですが、ここに一つの椅子を持ってきてあります。これは、「カンディハウス」という会社、10年前は「インテリアセンター」でしたが、その会社が今から40数年前に作り始めた椅子なんです。「インテリアセンター」は創業が昭和43年。1968年ですから、今から47年前なんです。それ以前の1963年から3年あまり、私はヨーロッパで家具の勉強をしておりましたが、帰国して間もなく「インテリアセンター」という会社をつくり、改めてヨーロッパを見直すという思いと、自分自身がデザインをしているということだけでは会社の発展がおぼつか

した。翌日、私は会いに行きました。その人が、スチウレ・エングという、ちょうど私とほぼ同じ年齢の、もちろん私より背は高いですが、そういう駆け出しのプロダクトデザイナーと初めてお会いしたんです。

スチウレ・エングのデザインに 改良を加えて販売

会ってはみたけれど、共通の言葉はないんです。私はもちろんスウェーデン語は話せませんが、英語もだめです。ドイツ語は何か話せませんが、彼の方はドイツ語はだめです。それでも、まあ何というか、ボデイランゲージというか、絵を描くとか、筆談するとか、お互い何とか表現することはできたんです。そこで、彼も事務所を開設して間もない訳ですから、日本で自分のデザインがものになるならば、こんなに嬉し

ないというか、自ずから限界が見えてきたということから、外部のデザイナーにも協力してもらおうという思いがあつて、ヨーロッパを旅した訳です。

そこで、ストックホルムの町の中で、この椅子の原型を見たんです。この椅子そのものはありません。この椅子の原型です。とてもかわいらしくて、価格も手ごろで、始めたばかりの私の会社でも技術的に何とか作れそうで、また、何とか日本でも売れそうだなと。これは直感的なものです。日本でも売れるかもしれないという思いがあつて、その椅子店の店主のところに行きました。そして、この椅子のデザイナーに会わせてほしいというお願いをしたんですが、その店主の方はなかなかジェントルマンで、すぐにデザイナーのところに電話をしてくれま

いことはない、と考えたようです。

私も何とか日本の市場で私以外のデザインで、もっと市場に受け入れられるものが欲しいと思っていましたから、お互いにそこで何とか意思が通じたんですね。

意思が通じたけれども、さて、デザインの契約ということになると、なかなかうまくいかない。誰か通訳してくれる人がいないかと思つて、そういう話をしているところに思い浮かんだのが、中村昇さんなんです。(会場にいる)中村さん、すみません。中村さんは、若い時に10年あまりスウェーデンに留学したり、会社に勤めていました。会社といっても大きな会社ですよ、「イケア」なんです。イケアの設計部でデザインの仕事をなさったりしていた。スチウレ・エングも私も、お互いに中村さんが共通の友人だったということもあつて、何

とか中村さんに取り次ぎをしてもらったという経緯があります。スウェーデンには中村さんがいらっしゃったけれど、日本では他の方が通訳をしてくれました。とにかくスチウレは、3か月後くらいに日本までやって来てくれました。それで、このデザイン契約の話をしたんです。最初はスウェーデンで売っていたものをほぼ原型のままつくって市場に出したんです。ところがなかなか売れないんです。3か月経っても、半年経ってもなかなか思うようには売れない。私は直感で「こんなはずはないな」と。きつと売れると思っていました。そのうちに心配になって、またスチウレがやって来ました。一緒に百貨店とか、売れないけれど我慢して扱ってくれている店を何軒か訪ね歩いて、そこで初めて市場調査をやったんです。いくつか改良点が出てきました。結果としては面

白いことに、もう少しレベルアップしようと。値段も、もう少し高くなってもやむを得ないけれど、もっと柔らかく、優しい椅子にしよう。ここに原型がないからちょっと比較はできませんが、とにかく、総体的にバージョンアップして、もっと良い製品にしようという結論になったんです。そうしたことを何度か繰り返しやっているうちに、ほぼこの形が出来上がった。スタートしてからこの形までに、2年あまりかかりました。それから市場でこれが受け入れられ、実に今日まで販売し続けているんです。毎年販売が増えているんです。昨年の実績では、ほぼ5千脚販売しています。この椅子は、いろいろなところで使っていたんです。家庭でも、あるいは図書館でも、病院、教育機関、大学とか、多くのところで使っていたಿದೆいます。

スチウレ・エングからの提案

当然売れば売れるほど、デザイン料というのがスチウレ・エングの口座に振り込まれることになるんです。ちよっとお金の話になるんですが、今から2年半ほど前でしたか、スチウレが奥さんと一緒に私のところに来られました。そして大事な話をしたいと。こっちは大事な話といわれると、さて何だろうと構えてしまうのですが、何も構えるような話ではなかったんです。スウェーデンでは、この年齢になると、もうお金がなくてもいいんです。一生お金の心配はありませんから、「ロイヤリティ、デザイン料はもう払ってくれなくていい」と言うんです。私はデザイナーがご健在であるうち、あるいはご存命であるうちに、デザイン料を払わないなんてことは考

えたことがないです。もちろん、これからも払い続けるつもりです。「カンディハウスが倒産しない限りはデザイン料をお支払いします」と話しました。スチウレは、「それならば、このロイヤリティは、この地域の若者のために使ってくれないか」、「寄附をしたい」と、こういう話になりました。隣の奥さんに「それで、いいだろう」と言うと、奥さんは「結構でございます」という話になりました。そんな話を聞いて、私はえらく感動しました。お互いに共通言語がないまま、しかし、お互いに尊敬し合いながら、誠実な付き合いをしてきたつもりですから、そのことには自信があります。言葉がなくてもこういう関係が築けるんだなということに私は大変感動し、喜んだ訳です。



スチウレ・エング氏と長原 實氏

北海道文化財団に基金の運営を託す

そんな話になってから、さて、どうしようか。会社で運用するというのもありますが、会社というのは寿命がありますから、どこかで途切れるかもしれない。旭川家具工業協同組合で運営しようか、これもいろいろな形で利害が偏ってしまいかもしれない、あるいはPR用になつてしまいかもしれないということがある。旭川市の教育長のところにも相談に行きました。「こういうものについて、運用をやってもらえないでしょうか」と。私の方としては、ものづくり系ですから、まず大学にいきたくても経済的な理由でいけない人、あるいは海外研修その他、ものづくりに関わる情熱を持った、モチベーションの高い若い人たちに使ってもらいたい。これはスチウレと同じ考えなんです。し

かし、旭川市では、小・中学校まではその範囲だが、大学は我々の範囲を超えるという話になりました。

それで思いついたのが、磯田さんだったんです。「北海道文化財団ならば、もしかしたら受け入れてくださるかなあ」という思いがあつてお願いに行つたのです。

私は「かなり難しいんじゃないかな」という思いがありました。なぜならば、北海道が設立した財団ですから、当然ながら理念もあるし、いろいろな制約、約束事もあるはずです。そんな中で奨学金のようなものを扱う方法があるかどうか、その方法をみつめて欲しいということをお願いに伺つたんです。磯田さんは、すぐその場で「分かりました。何とかやってみましょう」という返事をくれました。磯田さんがそうおっしゃってくれるのだから、たぶんこ

れは大丈夫だろう。いい返事を待っていました。しばらく時間がかかりました。2年近くかかりました。これは仕方がないんですね。手続き上のことがいいろいろありますから。

しかし、ようやく今年の春に、この「人づくり一本本基金」というものがスタートすることができたんです。現在、海外研修を希望する人を募集していますし、来年の春から、ものづくり系、必ずしもものづくり系とは限りませんが、大学に入りたいけれども、経済的な理由で大学に入れない人への奨学金も始まります。世の中にそういう人たちがたくさんいるんですね。今、貧困児童が6%に達しているとも聞いています。この6%という数字を聞いただけでも、我々のやろうとしていることは、ほんの小さなことだと思えます。しかし、それでも、地域のために、あるいは若者のために未

来を開くという可能性があるならば、この価値が十分あるだろうということから、今スタートしたのです。

皆さんのお手元にパンフレットがあるかと思いますが、関心のある方はぜひお持ち帰りください。それほど高いお金ではありませんが、これは貸し付けではありません。返済の必要のない給付です。有効に使っていただきたいと思えます。

これは先ほどから話していますように、本当は私の発想ではないんですね。スチウレ・エングがそういう話を私のところに持ってきたから、スチウレだけに負担させたのでは申し訳ないというか、筋が通らないということもあって、私もできるだけのことはしようとして、一緒にやりましょうということで、この基金が

できたという訳です。どうぞ皆さんも周辺の方で有効に使っていただける方がいらっしやいましたら、是非ともご紹介いただきたい。こんなふうと思う次第です。ものづくりに関わることで、海外も含めて勉強した若者が、この「君の椅子」の仕事を引き継ぎ、つくっていく人になっていただけることも期待している訳です。



木の持つ個性を生かしたもののづくりを

森―林―木を見る 木の個性と「一本技」

（木の作家ジョージ・ナカシマ）

木の声を聞いて、何をつくるかを考える

ここに高橋三太郎さんがおでこをピカピカにしてあそこに座っていらっしやいますが、三太郎さんの展覧会も今日、道立近代美術館で鑑てまいりました。「この仕事を始めて30何年、ここまでやってきました」という仕事を、全部知ることが出来ました。なかなか素晴らしい作家が札幌に城を構えている。「なんで札幌なんだろう、本当は旭川じゃないの」という思いもあります、しかしまあ、それはそれで、札幌だからできたのかもしれない。しかし、三太郎さんという人がいなければ何もないので、

これもまた、面白いことなんです。特に椅子にこだわる人がここにも一人いるということ、は、私にはとっても嬉しいことです。

さて、世の中に、「木を見て森を見ず」という言葉がありますね。これには当然深い意味があるんですが、しかし、「森を見て木を見ず」という話もあるんです。この話をしたいと思います。

この話は受け売りなんです。ご存知の方がいらっしやると思いますが、1990年、今から25年前ですが、この年に亡くなられた日系アメリカ人でジョージ・ナカシマという人がいました。この人はまさに木工作家なんです。この人の哲学は、まさに木を見ることなんです。森を見るのではなく、木を見るんです。

一本一本の木はそれぞれの個性を持っているということです。木は自分の育つ場所を選ぶことはできません。風に吹かれて、あるいは動物

とか鳥に運ばれて、どこかで芽を出すんですね。その与えられた環境の中で、数百年にわたってそこに根を下ろし、そこで育つ。これが木です。したがって、同じ木が育つ訳がないんです。例えば、南斜面の環境の良いところで育った木は、すくすくと確かに素直に育ちます。円くて太く育つんですね。逆に北斜面に育った木は、毎年雪に倒されながら、春になると起き上がる、次の年もまた倒されながら春にはまた起き上がる。こういうことを繰り返しながら、根曲がりという、少し曲がって育つんですね。針葉樹では、特に檜なんかは、こういう木を職人たちが探して歩く。「何のために」というと、社寺の反りをつくるのです。あるいは、社の屋根をつくるんです。そのためにそういう木を探して歩くことがあるんです。

我々の使う木は広葉樹ですから、そういう

ところには使われません。で、南側で育った木は素直に育っていますから、確かに比較的に育ちます。我々が椅子をつくる時には、どちらかというと、厳しい環境で育った木を使った方が、丈夫な椅子ができるんですね。使い道を考えながら、なるべく木目に沿った使い方をすれば、丈夫な椅子ができます。木を見ながら、何をつくるのかということを考えるんです。ここが大事なところなんです。ジョージ・ナカシマの場合はそれが実に徹底しているんです。

一般的に20世紀という時代は、木材も工業原料として使われてきましたね。それは、住宅であつたりさまざまな建築物、そしてそれを



「君の椅子」10年展 連続講座で講演する長原 實氏(平成27年9月5日、札幌芸術の森)

工業原料とするためには、収縮とかくろいを直す必要がありますから、合板になったり集成材になったり、そういう2次加工を施されて工業原料として木は使われました。

ヨーロッパでも、20世紀の時代は、やはり木材産業といえば、合板やチップボード、木材繊維板とか、もっぱら工業原料として使われるために、木は育てられ伐採されてきました。

ジョージ・ナカシマは、全くそれと逆なんです。むしろ、そういう工業原料にならない木、工業原料としては価値のない木、こういうものを、一本一本の木の個性としてその中に美しさを、新しい個性をみつけて、それを家具にしました。そういうことですから、もちろん一品ものです。

対して、この世界がいつまで続くのかということに、かなり憂慮されていたことが分かりました。私もその時までには、工業化のために椅子をたくさんつくってきたんです。工芸というよりは、たくさんつくって、たくさん売れたかったです。そういう考えで仕事をやってきましたが、その時から、少し考えが変わってまいりました。

これは1990年のことですから、やがて間もなくバブルが崩壊するんですね。日本経済の環境が全く変わってしまった時代に入ります。会社の売り上げはどんどん下がり、赤字になるし、必死になって会社の再構築をやっている時に、ちょうど、ジョージ・ナカシマさんが亡くなってしまったんですね。その時に私は、一つの時代が終わった。21世紀をイメージしながら木工の仕事に深く携わって

ジョージ・ナカシマの憂慮

私はジョージ・ナカシマを訪ねて、ニューヨークという町へ行きました。アメリカのペンシルベニア州でしたかね。ニューヨークから南へ200〜300キロ程のところに、ニューホープという町があり、そこに彼のスタジオがありました。

私もジョージ・ナカシマの仕事はある程度知っていましたが、お会いしてみるととても気さくな方で、私も木工の仕事を長年やってきたから、その点では非常に共通するところもあって、2〜3時間、食事もごちそうになりました。がら、ゆつくりと話をすることができました。大変嬉しく、その中で、先ほどお話ししたようなことが、彼の口から渾々と出てきたんです。

彼は、この20世紀の工業化社会というもの

いた人が亡くなられた。そのことに私は大きな失望というか、憂慮を覚えました。そして間もなく、アメリカの副大統領だったゴアさんが「不都合な真実」という本を出されました。お読みになった方は多いと思いますが、私もすぐにその本を読みました。読んでみてさらに、考えが深まったのです。

「一本技」の誕生 ― 木の力と職人の力

ジョージ・ナカシマは「不都合な真実」とはもちろん言っていません。しかし、20世紀の文明は、やがて終わりがくるということを言っていた。ということを考えてみると、それが、不都合な真実だったということに気が付き、私も家具づくりについて、それまでの考えを改めるということ、そして、改めるということの一つの表明として、「一本技」とい

う仕事を始めたんです。

基金は「人づくり一本木基金」ですが、私の場合は「技」の「一本技」です。これは、ジョージ・ナカシマの受け売りといえれば受け売りなんです。ジョージ・ナカシマは亡くなられて、工房は娘さんとお婿さんによって今でも続いているのですが、一つの時代が終わったということから、日本でこれを引き継ぐことには、それなりの価値、意味があるだろうということで、「一本技」を立ち上げました。一つ一つの木に個性を見いだして、そこに職人の誇りを見つけよう。世の中に三等、四等という低い格付けをされた木材があります、それが家具になると、数十倍の付加価値を生み出す。そういうことが木には可能なんです。それが木の力と職人の力です。そしてまた、それを求めてくださる方が、大勢ではありませんが、結構いらっしゃるとい

はそれで大変正しいことだと思えます。特に中川町さんとは、最近、我々のところに木材を供給してくれる仕組みができたのですが、供給されてくる木を見てみますと、だいたい直径40cmくらいなんです。一般的に胸高で直径何cm、というのが一般的です。冬の積雪も考えながら太さを測れる位置が胸の高さなんです、だいたい直径40cmくらいの木を基準に伐り出されてきているということが分かってまいりました。

先日、「君の椅子」の展覧会のパーティーの時に中川町長にお会いし、こう申し上げました。「直径40cmくらいを基準にして伐採されているようですが、これはもったいないです。あと20年我慢すれば50cmになります」と。つまり樹齢100年くらいになるんです。40cmの木を見て年輪を数えてみると、大体70〜80年なんです。

うことです。ジョージ・ナカシマは「私の最大の得意先はロックフェラーです」とおっしゃっていた。これはまたすごいことなんです。そういうことがあって、私はこの「一本技」という、一つ一つの家具を職人が丹精をこめて、しかも世の中で認められていない、価値が低いとされている木材を生かしてつくる。その木は数百年の時間をかけて育った古木ですから、もちろん、古木には古木の価値がある、ということ进行を言いたいので「一本技」を始めました。

北海道の木材に付加価値を

最近、旭川家具でも道産の木材を使おうという運動が行われています。これは、中川町、下川町とか、北海道でいえば過疎地です。しかしこの地域は町の70〜80%が森林なんです。森林で地域おこしをやるうという訳です。それ

だからあと20年経てば50cmになります。直径50cmになると、まず、単価が1割は上がります。そして、年間1%くらい成長しますから、その1%を利息と思えばいいんです。そうすると20年おけば利息が20%になります。そして、その上に単価が10%くらい上がります。いわばもっと付加価値を稼ぐ方法があるんです。今40cmで良しとして伐り出しているものを、これから20〜30年かけて、40cmの木の中でも伐り出すものと、残すものを選別して、あと20年待つ木も選んでください。そういう過程を経ながら、平均的に50cmで伐採するようにすれば、地域の収益はもっと上がるはず。私たちが家具として使う側からみても直径40cmより50cmの方がはるかに使い勝手があるから、当然値段が高くても買います。

それからもう一つ町長に申し上げたことがあ

ります。「市場に供給し過ぎてはダメです」と。今はまだ、北海道の広葉樹で家具をつくる人は少ないんです。木材業界もそうですが、ほとんどが輸入材に頼っています。地産地消という言葉のとおり、当然、地元で必要なものが必要な量だけ供給されればそれに越したことはないんですが、今、無理をすると、将来また禍根を残すことになります。なぜかというと、北海道の歴史にはとても悲しいことがあるんです。それは、最初に磯田さんからお話があったように、戦後、1950年代、1960年代、あるいは1970年代の初めの頃まで、1ドル360円で為替が固定されていた時代に、北海道の広葉樹がどんどん伐り出されていったんです。当時は農林省でいうか、林野庁でしょうかね。ある程度、当然伐採する基準があったはずなんですが、業者

の方は、伐採すればどんどん海外に売れていく訳です。ですから、業者の方はその基準をなかなか守ろうとしません。効率を考えれば、狭い地域で少しでも余計に伐採した方が効率が良かったんです。結局、管理すべき人と現場との間にはかなり価値観の乖離があつて、それを十分埋め合わせるだけのモラルがなかったと思います。つまり、あまり生臭い話はしたくはありませんが、過剰な接待とか、そういう癒着のようなものがびこって、北海道で何百年もかかって育ってきた広葉樹林がたった30年そこそこの間に伐り尽くされてしまった。こういう歴史があります。

しかも、それは国策だったんです。日本中が焼け野原になり、戦後復興のために住宅需要がたくさんありましたから、針葉樹は建物のためにどんどん伐採されました。広葉樹は

外貨を稼ぐために、日本経済復活のために、どんどん伐採されて輸出されていきました。国策のために、北海道の広葉樹、北海道の森も犠牲になったということが言えます。これが続けてはいけません。「とにかく伐り過ぎないように温存してください。50cmまで20年待つてくれれば、もっと町は儲かるようになりますよ」と、こういうお話をしました。町長さんとは短い時間の立ち話でしたから、まあ、どうなりますか。こういうことには、常に立場によって利害があつたり理念が違つたりしますから、よほどしっかりした管理能力を持っていないと難しいことなんです。



北海道の雪深い森で伐採される木(中川町の町有林)



旭川家具工業協同組合の森で植樹をする、左から川上 元美氏、桑原 義彦氏、長原 實氏

木材産業と工芸産業 (Long & Slow)

人を磨いて地域を磨く

今、私は旭川で、ものづくり系の大学をつくらうという運動を一生懸命やっています。2年前に東海大学旭川キャンパスが閉鎖されてしまって、旭川のものづくりに対して知的な人材を育成する場がなくなってしまった。このことに、私は大きな地域の損失を感じる訳です。次の時代をつくるのは次の世代ですから、人を磨かなければ地域も磨かれません。ものづくり系の大学を失っちゃいけないんだということを唱え始めて、市民の共感を得ながらこの運動を展開して5年になります。ようやく、昨年11月の旭川市長選挙で、現在の旭川市長が、公立のものづくり系の大学をつく

るという公約を掲げて当選しました。今、大学づくりの具体的な計画に入りつつある段階なんです。何とか、あと少なくとも3年以内に大学をスタートさせたいと思っていますが、私ももう歳ですから、そんなに大きな声を上げて活動することもできないんです。市民の力というのはもちろんありますから、これによって地域が理想とする大学をつくりたいと思っています。この基本的な理念は、配付したレジュメに木材産業と工芸産業と書いてありますが、ここが重要なんです。

上質なミズナラの生育に適した北海道

針葉樹は、おおむね木材産業に適するので、旭川に道立の林産試験場というところもあります。これはもっぱら工業化のための加工技術を研究し、普及するための試験場です。

しかし、工芸というのは、もちろん針葉樹も使いますが、広葉樹による仕事が多いんです。世界中どこを見てもそうです。また、長く使いた

い建物、美術館だとか公共的な建物には、内装材として使われるのは広葉樹なんです。そして、

普遍的な材料はミズナラです。最も上質なミズナラを生産する気候風土を備えているのは、この北海道なんです。本州ではないんです。世界各地を見ても、北欧ではナラはほとんど育ちません。中央ヨーロッパでは育ちます。これはどちらかというと、ホワイトオークではなくダークオークです。少しグレーがかったオーク、ナラ材がヨーロッパでも採れます。アメリカでもオークはたくさん採れます。アメリカは広いですから、ホワイトオークもレッドオークも、ダークオークも採れます。種類は実に多彩です。

それでも、家具として、最高級品として扱わ

れるのはホワイトオークなんです。しかも、かつてのヨーロッパでは北海道のオークが最高品と言われていました。たった50年前の話です。

大量生産より、工芸的な家具づくりを

皆さん、旅の好きな方は多いと思います。ヨーロッパ各地の美術館や宮殿などを見て歩いても、数百年の歴史を持った建物の内装材は、ほとんどがオークなんです。ナラです。中にはチークだったり、ウォールナットだったりするものもありますが、なんといってもオークが多いんです。そして、それが数百年の使用に耐えてますます味が出ている。そういう宝物が北海道にはある。これを北海道の木材産業としてではなく、工芸産業として使うのが最もふさわしいと私は思うんです。

ですから、北海道の家具も、工芸的な家具

よりは工芸的な家具にしたい。工業的な家具というのは、大体20〜30年で捨ててもいいものというイメージです。また、捨ててもらわなければ困るところもあります。

今、世界の経済システムは、まだまだ大量生産、大量消費という時代を追いかけています。日常的にご家庭で使われている家電製品、テレビや冷蔵庫、洗濯機などは、実は10年くらいで買い換えてもらうように作っているんです。最近には特にデジタルになっていきますから、なかなか修理もできない、部品もない。結局は、10年そこで買い換えなきゃならない。そのように作られている。また、法律もそれで良しとしていますから、限りなく資源を使い果たすことになります。エネルギーも同様です。このような経済のあり方は、おそらく22世紀までは持たない。21世紀のどこかで終わるの

ではないか。既にこれは誰もが気づいていることです。持続可能な社会を目指さなければいけないんです。現在のシステムは、基本的に間違っていると言えます。

20世紀型産業との訣別 持続可能な社会へ

今、我々が考えている「ものづくり大学」も、その理念を基本に据えていきたいと思っています。化石エネルギーの消費を減らす、資源の消費を減らす、温暖化を押さえる。温暖化というのは誰もよく分かっているんですけど。今が限界かもしれないんです。もっと先だろうと思っている方は当然いらっしゃるかもしれませんが、それは、今の人間の知力では分りません。

そして、原発です。これは二酸化炭素を減

らすからいいんだという理論があって、東日本大震災が発生するまでは、かなり容認されてきました。容認というよりは、むしろ積極的に原発をつくってきたんです。しかしどうでしょう。もともと原発というのは、最終のゴミの処理ができていないところから見ると、これは持続可能な社会ではないんです。これに拠って持続可能なものをつくることはできません。しかし、今の政治も経済も、動きはまだまだそういう危機感の上には立っていないと言えます。国によって、地域によって見方や対応が違う訳ですが、残念ながらこの国ではまだ経済を最優先にしています。どこかの大国と同じような考えが、まだこの国にもあるということは、大変残念なことだと思います。

今、我々旭川の家具づくりに携わる職人たちは、大量生産をしようとは思っていません。

必要な分だけをつくろうと。そういうことを考えている訳です。今日、美術館で鑑賞した高橋三太郎さんのものづくりの理念も、決して大量生産しようとは思っていないですね。それこそ必要な分だけつくろうとしている。足るを知ること、そういう思いの中で仕事を進めているということだと思います。

北海道が自立するための22世紀へ

私はこの北海道こそが、この国で自立するための最も良い条件を備えている地域だと思います。森もたくさんあります。食糧も潤沢にあります。まだまだ良い環境が残っています。これを守らねばなりません。北海道が独立という用語がありますが、北海道が自立するための22世紀、我々は今、真剣に考え行動することが必要だと思います。

その精神を、この「君の椅子」プロジェクトの中で、生まれたばかりの赤ちゃんのときから、この小さな椅子を同伴者として、そういう精神を持ち続けるようになっていけばいいなあと、私はそう思っている次第です。



旭川に公立「ものづくり大学」の開設を目指す市民の会にて

〈質疑応答〉

はじめてつくった椅子「ロカール」

〈質問者Aさん〉長原さんが、インテリアセンタ―で最初につくった作品というのは、どういうものですか。

〈長原〉私が最初につくったのは、1969年に北海道からどんどん輸出されていたナラのインチ材（※輸出規格で製材された木材）を使って、それに革のシートを張ってつくった椅子です。

当時、そういうスタイルの椅子というのは、日本では全く売られていませんでした。私は3年あまりドイツにいて、私なりにいろいろな椅子のスケッチをしていましたが、その中の一つです。会社をスタートさせて、従業員10人ほどの仲間で作り始めた最初の椅子でした。

実はその椅子を、最初は道内の皆さんに使っていただきたいと思って、北海道の流通の中で売りたいと思ったんですが、ほとんど扱ってもらえなかった。それで、だんだん資金も枯渇するし、在庫も溜まるし、大変苦しい時に、皆さんご存知だと思いますが、札幌の建築家の上遠野徹さんが、その椅子をご覧になって「この椅子は面白い。私の建物に使ってみたい」とおっしゃってくださった。それで私はかなかな希望を持てたんですね。それでも、なかなか売れるものではありませんでした。上遠野さんから、「君、この椅子を本当に売りたいんなら、東京に行きなさいよ。東京なら売れるかもしれないよ」というアドバイスをいただいて、東京のデパートにその椅子を持ち込んだんです。さすがといいますか、まあ、東京にはいろいろな方がいて、1か月くらいでその椅子が

売れるようになりました。北海道では、今でも多分あまり売れないかもしれませんが、その椅子はどちらかというとバタ臭いというか、北欧の匂いのする椅子だったんです。今ならもっと買ってくださる方がいらっしやるかもしれません、大変難儀をいたしました。

でも、ビジネスの始まりというのは、誰もやっていないことをやるのが、結果的には成功の道ではないかと思うんです。その後、ここにいらっしやる中村昇さんのデザインもつくらせていただいたり、いろいろな方の協力を得て、まずまず会社が出来たということになるんです。その最初の椅子が「ロカール」です。

〈質問者Bさん〉今もつくっているのですね。

〈長原〉つくってはいません。



でも、東京の百貨店でこの椅子が売れるようになって、会社がようやく歩き始めたというか、従業員に給料を払えるようになってきたという時代のことですから、今から45〜46年前のことですね。私にとっては、運命的なといいますか、大切な椅子ではあります。

〈質問者Cさん〉その頃で社員は何人くらいいたのですか。

〈長原〉最初は10人くらいです。この椅子がぼつぼつ東京で売れるようになって、どんどん人を増やしていききましたから、10年後の昭和53年には、50人くらいになっていました。



長原 實氏がデザインした、インテリアセンター（現カンディハウス）の第一号製品「ロカール」

ものをつくらない、ものづくり

〈磯田〉長原さんが私におっしゃったことで非常に印象深いことがあるんです。「これから、ものをつくらない、ものづくりだ」と、言うてくださったことがあるんです。ものをつくること、ものづくりだと思っていましたが、長原さんが「ものをつくらない、ものづくりがこれからは大事だ」とおっしゃいました。

先ほどの椅子は「ロカール」というのですが、「ロカール探偵がゆく」というインターネット上の記事の中で、長原さんは初期の「ロカール」を探しに行かれます。札幌のあるご家庭を訪ねられました。そのご家庭の椅子は結局「ロカール」ではありませんでしたが、長原さんはその奥様と意気投合しました。その方は、ご主人との長い歴史のある家具を、もう一人で

なければいけない、と思う訳です。

家具も寿命が来ます。全てのものに寿命があります。20世紀のものづくりは、先ほど話しましたように、だいたい20〜30年で使い切ってほしいという思いでつくってきました。しかし、21世紀はそれではだめだと思う訳です。やはり、私がジョージ・ナカシマから教わったのは、50年〜100年、100年使える家具ということとです。50年〜100年使う。50年使うためには、修理再生しなければいけない。特に椅子は、布を張ったり、革を張ったり、ビニールレザーを張ったりしています。こういう材料は、耐用年数がせいぜい20〜30年ですから、張り替えなければなりません。張り替えると、40〜50年使えるものになります。50年使えるということは、2世代使えることになります。我々が使う木というのは100年以上かかって育った

は使い切れなくなつたと話された。そこで、サイズを小さくして、次の世代に、自分の身内ではないところでもその家具を世に出すという紹介がされていました。私はものを長く使うという長原さんの精神はこういうところにあるんだろうと、それが実現しているのだろうなと感じました。

長原さん、ヴィンテージのお話とか、修理して再販するなど、近年の取組みについてのお話をしていただけだと思います。

〈長原〉このレジュメの4番目に、「木材産業と工芸産業（Long & Slow）」と書いてあります。まさにこのLong & Slowなんです。木材を育てるにも、また、木材を原料として活用するにも、長い時間を十分費やして、そして持続可能な社会を目指した上で活動し

木です。そのことを考えると、産業革命という、200年を超える長い時代を経て今日まで、産業が経済を支え、人を支え、人を幸せにする、と信じられてきたのですが、どうやらそれは間違っていたということに、みんなが気が付き始めた訳です。

私は、10年ほど前でしようか、全国家具工業連合会の会長を仰せつかっていたことがあります。このときにつくった一つのシステムに、「家具修理職人.com」があります。これは、ネットで検索していただければすぐ出てきます。ここでは、皆さんの生活している地域の最寄りの椅子修理職人を捜し当てることができます。そして、全国のどのメーカーでつくったものでも、そこで修理してもらええる仕組みをつくりました。私どもはあまりお金がありませんので、宣伝やPRが十分ではないと思いますが、

とにかく「家具修理職人.com」を開いていた
だければ、お望みの修理をしてくれる職人が
必ず出てきます。それを活用していただけれ
ばいいなあと思うんです。

また、豊かな時代に立派な家具を買ってくだ
さった方々が高齢になり、マンションに引ッ
越したりなさるんですね。その時に、やはり使
い切れないというか、サイズの関係もあって使
えなくなった家具を、今、我々は引き取らせて
いただいています。これはまだ全国に広がって
いるわけではりませんが、カンディハウスは下
取りというほどの金額ではないかもしれません
が、買い取りをさせていただいています。それを
修理再生して「ヴィンテージ」として市場に出
しています。

東京・五反田に、それを販売する店もつくり
ました。今、幸いなことに、そこでは、本当は

とても高価な家具なんだけれども、半額くらい
で買える「ヴィンテージ」という家具のウェイ
トが高くなっている。「この次に出たときには
私にください」と、待っていてくださる方が結
構いらっしゃるんです。むしろ新しい家具より
もその方が人気があると言っていていくらいなん
です。そんな訳で、家具を長く大事に使おうと
考えていらっしゃる方が、この世の中にどん
どん増えているということは、嬉しい限りです。
また、職人冥利に尽きる話です。会社の宣伝の
ようになってしまいましたが、カンディハウスで
はこうしたことをやっています。

身近なものの中に新しさを発見する

〈質問者Dさん〉長原さんのお話をお聞きして、
私たちがものをデザインしたりつくったりする
ときに、今の20世紀型のやり方はもう古い、こ

れから新しい方法を模索しなければいけない。
そのときの時間軸となるものを考えるというこ
とですね。「ヴィンテージ」のことにしても、
百年持つ家具をつくることも、そうだと思っ
ます。あともう一つは、素材を見てジョージ・
ナカシマのように木を見て、さらにその材料を
上手に活かすということですね。もう一つ、
何か私たちがものをつくるときに規範となる
であろうことを、教えていただだけませんか。

〈長原〉あなたは、もちろんデザインもなさる、
おつくりにもなるんですね。デザインをできる
それなりのスキルも持っていらっしゃるクラフ
トマンですね。私は、私なりのデザインは今ま
でも随分やってきました。でも、ここに至って
「デザインというのは、決して奇抜なものをつ
くることではない。どこにでもある、ありふれ

たものの中に新しい良さがたくさんある。」と
思っています。どこにでもあるもの、あるいは、
もう百年も前から伝わっているような、例えば
ヨーロッパでいえば「ウィンザースタイル」と
か、あるいは「シェーカースタイル」とかいろ
いろなスタイルがあります。これもまた、それ
なりにもちろん、それだけ生き続けてきただ
けの価値はありますね。それもまた自分なり
の目で見直して、自分の手でつくり直してみ
る。そうすると、その中にオリジナルなもの
ができる、そういうことがあると思うんです。
「デザイン、デザイン」と、あまりデザインし
ようと力まないで、もっと身近なものの中に
新しさを発見する。そういう方が、これから
の時代にはふさわしいのではないかなあと、
そんなふうに思っています。

(終)



人づくり本木基金 創設記念セミナー「長原スピリットを語る」(平成27年11月13日、旭川市神楽公民館)

「ものづくりを目ざす人たちを応援する」
人づくり「本木基金 創設記念セミナー」

「長原スピリットを語る」

「と き」平成27年11月13日（金）
18時00分から

「ところ」旭川市神楽公民館「木楽輪」

「講師」桑原義彦氏

（旭川家具工業協同組合会長、櫨匠工芸代表取締役）

織田憲嗣氏（東海大学名誉教授）

「進行」磯田憲一（公益財団法人北海道文化財団理事長）

桑原義彦氏からみた 「長原實」という人間

長原さんだけは不死身の人だと思っていた

〈磯田〉今日のセミナーの講師は当初、桑原さん
お一人の予定でした。私が登場する予定では
なかったのですが、桑原さんの方から、一緒に

で実施してほしい」と私におっしゃっていたん
です。その時から「じゃ、桑原さんにやってい
ただきましよう」。長原さんは「うん、それで
よし」と。そういうことになっていましたので、
桑原さんがここにいらっしやることは全然問題
ないんです。

〈桑原〉まあ、なんだかなだそんなこと言って
引っ張り出されてきているんですが、今日の、
この演出を見てください。おそらく長原さん
がこの場所にいたら、一番喜ぶような仕掛けを
していますね。我々が何かをやる時、すぐ真っ
直ぐに走りがちなんです。磯田さんは、文
化的なことを幅広く考えていますから、今日
のセミナーの構成だってあなるんですよ。
オープニングの平崎さんはノコギリの奏者で
すよ。誰が考えますか。私はテレビなんかで

やろうという話がありましたので、桑原さんの
言葉を引き出す役割をさせていただこうかなと
思っています。限られた時間ですので、今日は
メインの桑原さんに語っていただきます。まず、
長原さんと桑原さんの出会いを含めて、どうい
う思いで長い間お付き合いをされてきたのか、
そのへんを語っていただければと思います。

〈桑原〉皆さん今晚は。本当は長原さんがここ
いなければならぬですね。しかし、残念
なことに長原さんは、もういなくなってしまっ
たので、磯田さんが、苦肉の策で私を引き出し
たんだと、そう思っています。

〈磯田〉苦肉じゃないですよ。長原さんにご存
命の時から藤田社長を通じて「僕は体調的に行
けないかもしれないけれど、ぜひ中止はしない

見たことがあります。我々、木に関わる人達
のことをさりげなくこの会場に持ち込む。こ
の磯田さんの演出の素晴らしさに、改めて惚
れさせていただきました。

ま、そんなことで、こういうことをすることが、
長原さんにとっては、ものをつくることだけ
じゃないんだということを、生前から我々に
話をしたり、自分たちにしっかりそういうこ
とをやってくれた人なんです。だから、文化
財団の磯田さんがこのような演出をして、本当
は今日ここに在るべき人がいない。今日長原
さんがいたら喜ぶだろうなという演出をして
くれる人なんです。もう、憎いです。また、
ここに在るべき人がいない、これも憎いです。
残念ながら、長原さんはもう姿、形としては
この世にいません。本当に私は長原さんが亡
くなってから、気が抜けたというか、何とも

自分に日々割り切れない気持ちがあります。たまさか、昨日、私の姪が急死をしましたので、それで、昨日と今日、お通夜と葬儀をやってきました。42歳です。棺の中に入った顔が長原さんの顔と重なって、何ともやりきれない気持ちになりました。「あー、人ってやっぱりいつかは死ぬんだな」と。長原さんだけは、不死身の人だと私は思っていました。長原さんは何をやっても規格外なんですよ。先ほど札幌芸術の森の講演の映像でも言っていました。が、「私は小さい」と自分から認めているんですね。これも、奥さんに怒られるかもしれませんが、規格外かもしれませんね。

異端児・長原實

私が初めて長原實さんという名前を目にしてから、48年が経ちます。実際に長原さんと話

ができて44年になります。私が昭和38年に北見から小僧としてこの家具業界に入った年、旭川市において海外研修生として国外へ技術研修に行く制度が出来ました。あの当時、木工関係は3名だったと記憶しておりますが、そこに長原實という名前が載っていたんですね。私はその新聞を見て、「木工業界の人間が海外で勉強出来る制度があるんだ」と、それにまず驚きました。驚くと同時にまだ丸刈り坊主のくせに、「よし、俺も3年後にそういう制度があったら、絶対に行きたい」と思わせてくれたのが、長原實という人でした。その後、実際にお会いできたのが、長原さんが向こうに3年間いましたから、4年後くらいになりました。長原さんとお会いした時も、やはり異端児でした。私にはどうしても日本人の顔に見えなかった。着ているものからヘアスタイルまで、特に長原

さんは彫りの深い人ですね。だからどうしても「この人、本当はドイツに行ったんじゃないやなくて、ドイツの人が日本に帰って来たのかな」と。そんな感じにさせるくらい、当時から長原さんの存在、長原さんから私どもが感じる「気」というものを持った、そんなような出会いをさせてくれた人なんです。

〈磯田〉長原さんもよくおっしゃったんですが、長原さん、桑原さんの関係を見ますと、年齢は10歳くらい違うけれど、なんて言うんでしょうね、本当に盟友という表現なのか分かりませんが、長原さんが桑原さんのことを語る時は深く信頼しているということが伝わってきましたし、また桑原さんが長原さんのことを語る時は、まあ、悪口もたまに言ったりしながら、しかし、熱い愛情を感じるんです。お二人の関

係について思い出すようなことがあればお話ししていただけますか。

説得する技術を持った人

〈桑原〉そうですね。先ほど言ったように、一言で語れといっても語れません。44年間同じ業界で、かたや海外に行っているいろいろな刺激を受けてきた人です。私は何も知らないでこの業界に入った人間ですから、当然、なかなか調子が合うポイントはありませんでしたね。

私は長原さんとちょうど12年、一回り離れているんですね。長原さんもイノシシ、私もイノシシ。そういう年回りという意味では、どこか通じるころがあったことは確かですね。だから、お会いしてから数年経って、私も組合事業やなんかで実際、長原さんといろいろなことを話す機会があった時、最初は長原さんの言っ



長原 實氏について語る、桑原 義彦氏(右)

いることがよく分からなかったんです。なんで長原さんそんなことを言うの、なんでそんなことをやらなきゃならないの、ということ、あるごとに突っかかっていました。長原さんはそのために怒るのかなと思うと、そうじゃないんですね。やっぱり長原さんは説得するんです。自分の考え方をちゃんと理解してもらうために説得をするという技術は当時からお持ちの方で、私はそういうことを何度か繰り返しているうちに、だんだん一回り違う年の差ですけども、長原さんの言っていることが少しずつですが、分かるようになってきたんですね。長原さんも、業界に入るときにはものづくりとして入った。私も、業界にもものづくりとして入った。そんなこともあるもんですから、おそらくレベルの差はあったと思いますが、いろんなことで、チャネルは合ってきた。おそらく長原さんも弟のよ

うに扱ってくれたんだと思うんですね。そんな環境ができたから、なんとなく長原さんの言っていることがよく分かるようになったのです。

仕事も遊びも真剣勝負

〈磯田〉長原さんと桑原さんの共通項は、いくつかあるかと思いますが、私が一番そうだなと思うのは、ものづくりの二人だけれど、この地域の裾野を広げるために、人をつくったということだと思っています。長原さんの口から、「桑原さんはね、匠芸が若い職人を採用する面談の時に、お前は独立する気があるかと、そういうことを質問する男なんだよ」と長原さんは僕に言ってくれました。カンディハウスでも服部さん、「一本技」を支えた人を育てた。長原さんは「あいつは本当の職人だ」と言っていて、2008年に服部さんは独立しますが、カンディハウスの名前で

仕事をしてた人なので服部さんという名前は地域の人は知らないけれど、カンディハウスで育った人と言えらると思うんです。人を育てたということでは、桑原さんもそういうことをされてきたしだが、共通項として地域のために人を育てたという考えはないでしょうか。

〈桑原〉そんな立派な考えでやった訳ではありません。たまたまそうなったということだけなんです。私は人好きです。にぎやかなことが好きです。一人は寂しいです。苦しくても、人がいっぱいいた方が、私は好きなんです。桑原さんもどちらかというと、厳しい人でしたけれど、やはりそういう人なんです。私はたまたま、長原さんとの業界でお付き合いさせていただいて、長原さんの人の育て方、仕事のやり方、業界の進め方、業界はなぜ必要なのかという

ところ全てのことが、先ほど言いましたように、だんだんお付き合いしていくうちに、それがことごとく分かるようになったのです。だからこそ、私は長原さんと親しくお付き合いさせていただいてきたんだと思います。ゴルフも一緒にやらせてもらいましたし、麻雀も一緒にさせてもらいました。長原さんの気性ですから、ふざけてゴルフをやったら必ず怒りましたよ。それと、麻雀も真剣にやらなきゃ怒ります。何事にも真剣にしっかりやれということは、あの人の持っている信念みたいなものが、いろいろなところで私どもに教えてくれるんですね。そんなことが、長原さんを好きになったという最大の理由だと思えます。

私は今日、「長原實さんを語れなんて言われても語れないよ」と言ったんですが、じゃあ、長原さんを語れと言われたらどういうことで語

れるのかなと、ずっと長原さんの思いを抜粋してみたんです。そうすると、私にとっては、こういう言葉しか出てこなかったんです。例えば「頑固」、例えば「信念」。たくさんありますよ、「厳しい人」、「何事にも一生懸命やる人」、「全てを全力でやる人」。もう一つ、長原さんの違うところは、それを『楽しみ』というところ、楽しむということも必ず教えてくれました。そして何よりも、長原實さんは「勉強家」だったと思います。全てのことに、人にも厳しいけれど、自分にはおそろくさらに厳しい人だったのではないかと。そんなふうに感じられる人でした。

時間は自らつくりだすもの

それとですね、あれだけ多忙な時間のやりくりをしながらですね、時間をうまく使う人なんです。こんなに忙しいのに、あの人の個

展は行ったよ、あの美術館でやっていた展示会は鑑て来たよ。それも奥さんと一緒にですよ。一度長原さんに「何でそんなに時間あるんですか」と聞いたんですよ。そしたら長原さん何と言ったと思います？「おまえね、人にはみんな24時間しか与えられていないんだ、時間は自分でつくるもんだ。おまえだって24時間あるだろう、俺だって24時間なんだ。その時間をどうやって使うかということが大事なんだよ」とそういうことを言ってくれました。あー、なるほどなあ。この人はそれだけ一生懸命に時間を自分のものにする人なんだと思います。

それともう一つは、現場主義です。必ず現場を見る。それは工場で仕事を見るということばかりじゃなく、海外へ行って海外の様子を見る、スチウレ・エングさんのように海外に行って実

際に会う、常に行動的なんです。そういうことができるというか、実践の人です。大分前になりますが、雑談の中で長原さんが「おい、俺ね、会社でどんなあだ名で呼ばれているか知ってる？」と言われたことがあるんです。「さあて、なんて呼ばれているんですかね」「サメって言われてるんだよ」「どうしてですか、何でも食べちゃうからですか?」「違うよ。サメっていうのも動いていないと生きていられないからなんだよ。だからそれに合わせて俺のことをサメって呼んでいるんだ」と。なるほど面白いことを言う人がいるもんだなと思いました。それだけ時間をうまく使えと言っていました。

〈磯田〉時間をつくる上でも匠の技があったといえると思いますね。ところで、今日とても嬉しいのは、旭川の高等技術専門学院の若者

織田憲嗣氏からみた 「長原實」という人間

〈磯田〉長原さんのお付き合いの中で深く人生に関わった方がここにもう一人いらっしゃっています。織田先生、どうぞ壇上にお上がりいただけますか。

織田さんにも、長原さんのことを、自分との関係を含めて語っていただければと思います。

長原さんとの出会いで、大阪から旭川へ

〈織田〉風邪を引いた後、喘息を患ってしまいましたので、お聞き苦しい声で失礼いたします。私と長原さんというのは、1989年に、名古屋デザイン博のときに、「デンマークの椅子180脚展」という展覧会を、初めて私の研究資料から開催したんですけれども、その会場に、

たちがたくさん来てくれています。先ほど美術館の話がありましたが、僕が15年前に初めて聞いたのは、長原さんが中古のフォルクスワーゲンを買って、ヨーロッパ中の美術館へ行ったことです。中学を出て家具職人になって、ヨーロッパ中の美術館を鑑て歩いたというのはどんな人なのかと思いましたが、それが長原さんをつくるベースの一つになっていたと思います。今日、高等技術専門学院の若い人がずらっといます。これを長原さんはとっても喜んでい

るのではないかと思います。

先ほどの映像にも出てきましたけど、僕がすごいと思うのは、病を得ても長原さんは22世紀のことを語った人なんです。こういう人がここにいたということは驚くべきことだったと思います。

たまたま私の不在中におみえになって名刺を置いていかれたんです。その裏に「北海道にすることがあれば、連絡をしてください」とメモ書きがございました。そのすぐ後に、偶然、私は仕事で芦別に来ることがありまして、ご連絡しましたら、もう退職されたんですけれど、企画にいらっしゃった清水さんがわざわざ迎えに来てくださって、そのまま車でトーヨーホテルに連れて行かれました。

その会議室で行われていたのは、国際家具デザインフェア旭川（IFDA）の第一回の打ち合わせだったんですね。そこで、ちょっと協力してほしいということから私が旭川に関わることになったんです。そして、長原さんが、導いてくださったおかげで今日の私がいる訳ですけれども、8年間私が単身赴任をしている時には、長原さんそして奥様に、随分、

公私共にお気遣いいただいたことがたくさんございます。

半年ほど前に長原さんからお電話があつて、腹を割って話をしようじゃないかということ、で、長原さんのご自宅の方に伺つて、2時間ばかり話をしました。それまでも先ほど桑原さんがおっしゃったように、頑固なところもありましたし意見の対立もありましたので、言い争うこともありましたが、心の底では常に尊敬する方でした。

貯金をはたいて帝国ホテルに逗留した人

長原さんのことを僕は知っていたきたいし、こんな話もした、あんな話もしたとたくさんあるんです。でも、いくつかに絞つて少しお話しさせていただきます。幼い頃のお話をしていた中で印象深いことがありました。小学生の

頃、旭川電気軌道がまだ東川に通じていた頃、除雪の作業をしたり、あるいは山菜が採れる時期になると、山に入つて山菜を採つてきて、露天の店を開いている所で山菜を売ることもやっただ、その中で、私は商売の基本をその時に学んだとおっしゃっていました。

それから、反骨の方でした。よく口にされていたのが、北海道の歴史というのは、本州資本の収奪の歴史だったと。先ほどの映像の中でも、北海道は自立すべきだということをおっしゃっていましたが、まさにそういうところが背景として常にあつたからではないかと思います。

長原さんは若い頃にドイツに行かれて、帰つて来られて、あるいはその前だったかちよつと分かりませんが、将来立派な良い家具をつくらうと、そういう志を立てられたと思います。

一文字の怪物

私はある方々によく言ってきたのですが、長原さんもその中の一人ではないかと思ひますので、ちよつとお話し申し上げます。長原さんは「一文字の怪物」だということを申し上げます。柳宗理（インダストリアルデザイナー）は柳で一文字、長大作（家具デザイナー）も一文字です。その他にもたくさんいらっしゃいます。いずれも蒼々たる人たちばかりです。そういうことを長原さんに申し上げたら、僕はそういう人の仲間に入れる人間じゃないから、とおっしゃいましたが、私は今でも「一文字の怪物」だったなあと思っております。

先ほど桑原さんがお話しになった中に、勉強家だったということがありますが、一度びつ

ご自分がお勤めをされていた頃に、貯金をされていて、そのお金を使って何をしたかという、僕はびっくりしたんですけれど、帝国ホテルに3週間ほど滞在したというお話をしてくださったことがあります。当時も今も、帝国ホテルというのはホテルオークラと並んで、日本を代表する超一流のホテルです。そういうホテルに、全ての貯金をはたいて3週間ほど滞在して、そういう所に泊まれるお客さんの感性とか、あるいはホテルでのおもてなし、あるいはホテルでのしつらいであったり、そういうことを北海道の旭川では知ることができなかった、そこでそういう所で自分の貯金を使い切ったとお話してくださったことがありました。全くこの方はただものではないと思います。

くりしたことがあります。私がまだ関西に住んでいた頃、大阪の家に訪ねて来られて、うちに1泊なさったことがあります。そして、その数ヶ月か半年、1年後くらいでしようか、その頃にカンディハウスに行くことがありました。そして我が家で使っていたデンマークの収納家具とどこかそれと似た感じのものがカンディハウスで新作として発表されていた。長原さんはスケッチが趣味で、常にアイディアが湧けばすぐにスケッチを描く。そして、何か良いものを見たらすぐにメモするとか、そういうことを常になさる方でした。以前、カンディハウスで私が見た作品は長原さんがデザインされた作品ですが、元になったデンマークのものとは完全に換骨奪胎した、見事な長原デザインになっておりました。

声でおっしゃったことがあります。「僕は受け取っていないけれど、ロイヤリティは年間これくらいあるんだよ」とおっしゃったんですね。その金額を聞いて僕はもうびっくりしました。おそらく日本で3本の指に入る家具デザイナーだと思います。それだけのロイヤリティが入ってくるようなデザイナーは、おそらく、ひよつとしたら、長原さんが日本でトップかもしれない。いかに自分の会社から売り出しているとしても、選ぶのは一般のエンドユーザーですから、エンドユーザーが長原デザインを選んでいるという、この現実はいいたものですね。それだけ、デザイナーとして優れた感性、才能を持っているんじゃないんです。

四番目は、教育者・長原實さんです。私が在職した東海大学でも、客員教授として講義を担当していたいたり、あるいは音威子府高校

五つの顔を持つ「長原實」

最後に長原さんについて、皆さんにお伝えしたいことがあります。

長原さんは五つの顔を持つ人でした。一つ目は、家具職人としての顔を持った方です。会社を引退したら、東川の山の中に工房を建てて、自由に思う存分自分で家具をつくりたいとよく話しておられました。

二つ目は、実業家としての長原實さんです。一代で世界にあれだけの販路を持つ企業を起こした、極めて感性の豊かな、それでいて経営手腕のある、まあ、ワンマンなところもありましたけれども、そうでなければ、今のカンディハウスはなかったと思います。

そして三つ目は、デザイナー・長原實さんです。ある時、長原さんが私にほんとに小さな

に行って講義をされたりさまざまな場所で若い人たちに、人材を育てるという思いからでしょう、それまでのご自分が培ってこられた知見、そうしたものを進んで足を運ばれて、講演されました。

五番目は、思想家・長原實さんだと思います。長原さんは本当に高い志を持っていて、その象徴が公立「ものづくり大学」の開設であるうかと思えます。ものづくりを通した人づくりということを常に自分の理念として掲げ、それをずっと推し進めてこられた思想家だったと私は思います。

この五つの顔を持った「一文字の怪物」、これこそが長原實さんだと思います。



長原 實氏について語る織田 憲嗣氏(右)

旭川が持つ、ものづくりの空気感

〈磯田〉ありがとうございます。今日は「長原スピリットを語る」会なので、限られた時間ではありますが、存分に語っていただきたいのです。今お話をいただいた織田さんと桑原さん、そして長原さんもそうだけど、こうした方々がこの旭川におられることの凄さ。そして今日会場にいらっしゃる方の中にも、ものづくりに関わっている方がたくさんおられます。そうした方がこの旭川におられるというところが、この地域の凄さだと思います。でも、市民の方はこのことを意外と知らないですね。古い話になりますが、平安時代に書の「三筆」といわれた、嵯峨天皇、空海、橘逸勢がいました。嵯峨天皇と空海は良きライバルだった。嵯峨天皇がある掛け軸を見て、「この掛け軸は

中国から取り寄せたものだが、こういうものを書ける人は日本にはおらん。これが西安の凄さだ」と言っただけですね。それを聞いた空海は「おそれながら、それは私の書になるものです」と言った時、嵯峨天皇は「そんなことがあるはずがない」と軸を開けてみると、そこに「西安にて、空海」と書いてあった。その時に嵯峨天皇は納得したんですね。空海は何と言ったかというところ「この文化の都・西安で書をしたためると、筆に勢いが出るのです」と言っただけです。

つまり、まちの持っている空気感、力なんです。それを考えた時に、産業社会の中で、木工家具の人を育てる空気感を持っているのは、日本では旭川だけじゃないですか。カンディハウスが木工芸が、長原さんが凄い、というだけではなくて、多くの人たちを育てた長原さんの

力が今、このまちの空気を育て、木工家具作家になりたい人は旭川駅に立つんですね。そんな、産業を発展させる空気を持ったまちが日本にあるでしょうか。それを残したのが、長原さんなんです。そしてまた、それをつくっているのが、桑原さんであり、織田さんであり、匠芸であり、カンディハウスであり、あるいは旭川、上川にある会社群なんだろうんです。ですから、高等技術専門学院の若者が今日たくさん来ておられますけれども、それを指す人が旭川駅に降り立って初めて、そこで、ものづくりの魂を得ていくのではないかと思います。旭川市民にぜひそのことを伝えていかなければならないと私は思います。この長原スピリットをこれからこの地域にどう活かしていくかということについて、桑原さん、何か感ずるところや、あるいは、こうしたいなとい

うことがありましたら、最後になりますけれど、ちょっといただけませんかでしょうか。

最後まで自力で生きることの大切さを

〈桑原〉長原さんを語るにはですね、やはり長原實を知らなければだめだと思うんですね。今日、奥様も来られますので、奥様の承諾を得て、私の長原スピリットは何かと言われたら、長原さんのこの数ヶ月に、自分の生き様を我々に最後の最後まで身を投じて教えてくれた。これが僕にとって長原スピリットの凄いところだと思っています。人間はこういうふうに生きなきゃだめなんだということを、本当に最後まで私は感じました。先ほどの芸術の森での講演は、亡くなる1ヶ月前ですよ。普通、もう死ぬという人が、あんなことできますか。「俺も、少し歩くのが辛くなったよ」と言って私の会社に来

られたんですね。その時に長原さんは、自分のことは自分でよく知っていたと思うんですね。私のところへ来る前に電話をいただいて「ちょっと話したいんだけど、おまえ、時間ある？」ということで、「ありますよ。それより長原さん、私が行きますよ」と言ったら、電話口で怒鳴られたんですよ。僕は気をつかって、自分が行こうと言っているのに怒るんですよ。「俺が頼み事をするのになんでおまえが来るんだ。俺が行く」と。そういう人ですから、私の会社まで20数キロあるんですが、自分で車を運転して来ました。私のところのショールームは2階なんですが、「おまえのところの階段を上るのがきつくなってきたよ」と言いながら上がってきて、いろいろな話をさせていただきました。

その時は、将来に向けて、いろいろなことを

でも、自力で2階まで上がった。3日後に亡くなる人が、階段を自力で2階まで上がった。それを聞いてびつくりしました。でも、びつくりはそれで終わらないんです。よくよく聞きますと、8日の亡くなる前に、ベッドに寝ていて、長原さんがトイレに行きたいということで、人の手を煩わせずに自分の足でトイレに行つて、その数十分後にこの世からいなくなる人なんです。よ。信じられますか。僕はこんな強い人を見たことがありません。こんな人生が送れたら、どのくらい凄いだろうと思ったのと、これだけ、最後の最後まで自分を燃焼する人が、この世の中にやはりいるんですね。僕は長原さんとは100年経っても出ない、そういう人物だと思っています。長原スピリットはこういうことなんだと思います。最後の最後まで自力でやるのが、どれだけ人間として大事なことを

頼まりました。「でも僕は長原さんのようにはできないですよ。まして、長原さんは今ここにいるのに、私がいと言えますか」とそういう話をさせていただきました。それも、亡くなる数日前です。その後入院した次の日くらいですか、私のところに「俺もとうとう病院に入っちゃったわ」と、そういう電話が来ました。「えっ」と思い、すぐお見舞いに行つた訳ですが、この短い間に我々に残してくれたことは、身を投じてといいますか、先ほど私が申し上げたように、信念のかたまりのような人で、わがままなところもある人でしたから、おそらく奥さんも大変だったと思います。

そして、10月5日に「自分の家に戻る」と言つて退院したようです。後から聞いたのですが、長原さんの自宅も居間が2階ですから、階段を上らなければならない。手すりを使いながら

なのかと、身をもつて教えてくれました。先ほど織田先生がおっしゃったように、怪物のような人でした。本当に凄い人を失いました。お通夜の時は泣かせてもらいました。私は今日、長原さんを語るのは辛いです。ありがとうございました。

〈織田〉今、桑原さんがおっしゃったように、生き様を私たちに示すことで、いろいろなことを伝えたかったと思うんです。そのように自分自身の生き方を振り返ってみると、恥ずかしさで穴があつたら入りたいという思いになります。

長原さんはお亡くなりになりましたけれども、その精神、目指したところというのは永遠にずっと残る訳ですから、長原さんの生き様からそれぞれが何かを読み取り、それぞれの人生の中に活かしていくことが、長原さん

に対する思いにつながるのではないかと、私は思っております。

「ものづくり王国」の思いを託したメモ

〈磯田〉桑原さんが、10月5日に長原さんにお会いになっていらっしゃいますが、実は私は10月6日の午後2時、長原さんのお宅で、ベッドに横になっていらっしゃった長原さんにお会いしました。私が行くのを待っていてくれたとお聞きしました。普通であればもうベッドに起き上がることができない状況だったと思います。が、ご自分でベッドの背もたれを傾けられて、私はその横で「一本木基金ができて嬉しいですね」と申し上げました。かすれる声で「ようやく間に合ったよ」と言ってくれました。もうこれ以上お話しにならない方が良いというところで、筆談で話しました。紙を引き寄せられて、

出来るはずであります。そして何よりも、一人ひとりの心の中に「内なる王国」を築くことは可能だと思います。この言葉を見て、皆さんと一緒に王國をつくりたい。そのため努力をしていかなければならないと思いました。

それぞれの長原さんがいらっしゃることでしょう。80年の長原さんの人生をこの地域のために活かされる、そんな市民・道民の一人でありたいと思います。明日は、「長原實さんを偲ぶ会」が開催されます。ご参加される方もたくさんいらっしゃると思います。長原さんの安らかな旅立ちのために祈る日でありたいと思っています。

今日は、盟友ともいえる桑原さんに来ていただきまして、ありがとうございました。そしてまた、大阪から長原さんの熱意で北海道に來ら

長原さんが、私の脇で最後の言葉をしたためてくださいました。ここに持つてきておりますが、「旭川市立北海道ものづくり大学」、こう書かれた後、「織田コレクション」、「IFDA」、「高等技専」、そして、「ものづくり一本木基金」。この四つを括弧でくくられて、「有機的運用」。そして矢印を書かれ、きつと未来に向けての矢印を書かれたと思います。「ものづくり王国」、「20〜30年後」。これだけを書いて私に渡してくれました。そして、手を合わされました。私がお預かりしましたけれども、これは、旭川市民への、そしてこの北海道への、長原さんが最後に託した言葉だったと思います。ものづくり大学ができるかどうか、私は分かりません。しかし、大事なものは「ものづくり王国」と書いた言葉ではないでしょうか。この地域の課題を市民が誠実に受け止めれば、「ものづくり王国」は

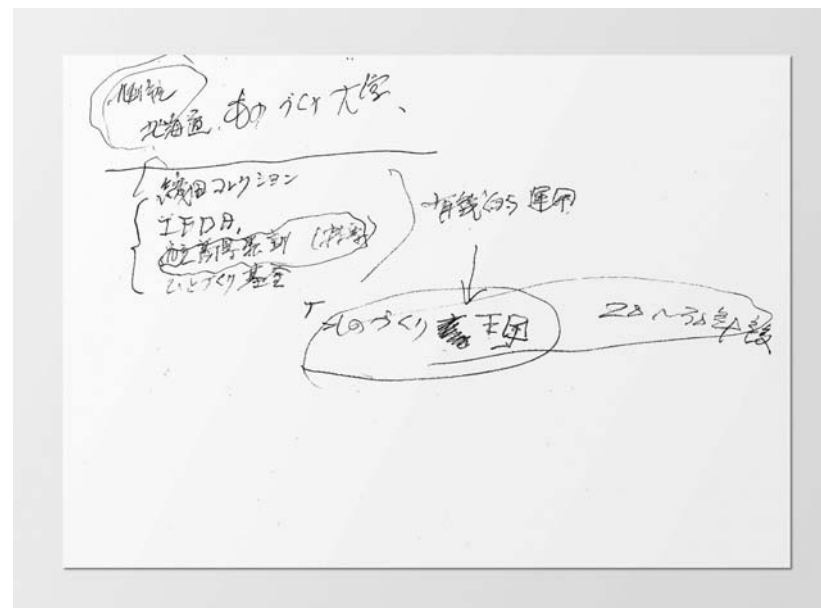
れた織田さん、ありがとうございました。この会場に足をお運びいただきました皆さん、長原さんはきつと、皆さんのお気持ちに熱いものを感じていらっしゃると思います。

どうぞこれからも、長原實という人物が80年の生涯で残したものを、次に伝えてバトンタッチしていきましょう。そして今日来てくれた、高等技専をはじめとした若者たち、ぜひ勇気を持って、半世紀も前に中学を卒業して、北海道の誇りを胸に立ち上がって今日を成した長原さんのことを仰ぎ見ながら、君たちが未来に育っていつてほしいと思っています。

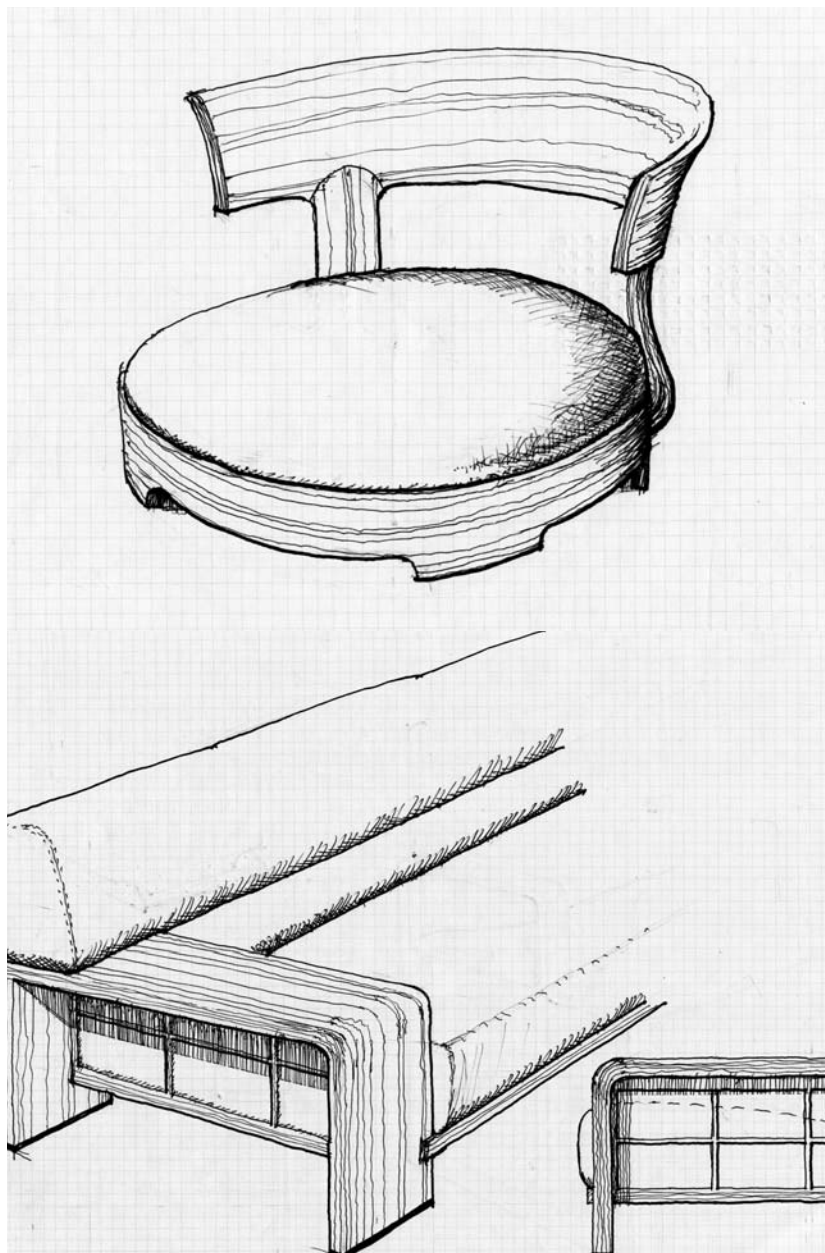
（終）



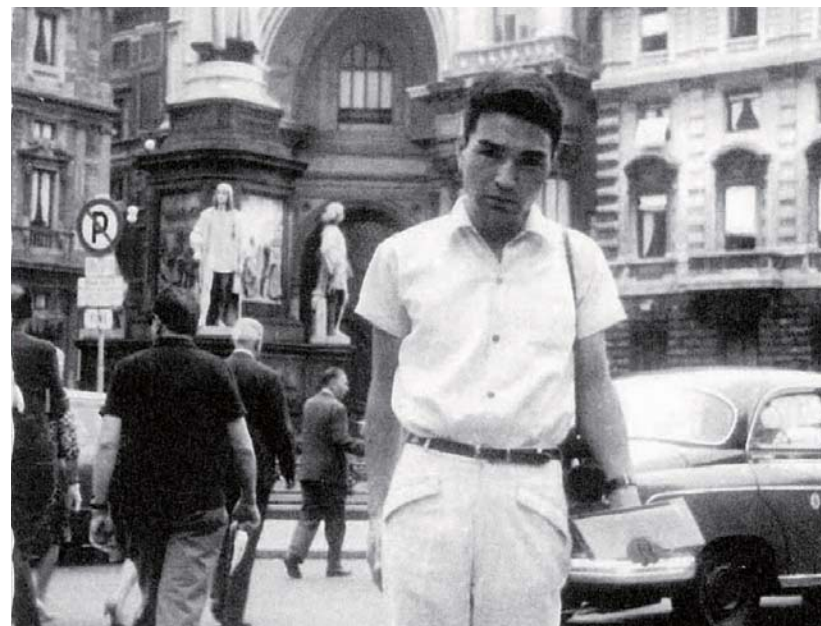
人づくり一本基金 報道発表会 平成27年4月16日(右からスチュウレ・エング氏、長原 實氏、磯田 憲一)



長原 實氏が最後に磯田 憲一に託したメモ



長原 實氏自筆のスケッチ



上) ヨーロッパの美術館を巡った若き日の長原 實氏



下) 1968年9月インテリアセンター設立、12月に工場竣工(基礎工事の様子)



上) 旭川家具の欧州進出を推進したとして北海道新聞文化賞を受賞
下) 北海道功労賞(ものづくり産業の振興)の贈呈式で高橋はるみ知事(中央)と



上) 第5回IFDA、北海道東海大学創立30周年記念「織田コレクション展〜1000CHAIRS〜」
下) 第9回IFDA審査会

略歴

1935年3月 3月1日 東川町生まれ
 1951年3月 北海道庁立旭川公共職業補導所 木工科
 （現 北海道立旭川高等技術
 専門学校）修了
 1951～62年 熊坂工芸 勤務
 1958年7月 通産省 産業工芸試験場
 デザイン科 伝習生
 1963年3月 旭川市海外派遣技術研修生として
 西ドイツ滞在
 箱物家具、脚物家具、家電などのメーカー
 で研修しドイツ国立木材技術大学に学ぶ
 1967年1月 旭川市木工芸指導所 勤務
 1968年9月 ㈱インテリアセンター設立
 専務取締役 就任
 1979年3月 ㈱インテリアセンター
 代表取締役社長 就任
 1980年 今もカンディハウスを代表する
 「ボルス」を、創業10周年を記念して発表
 1989年5月 国際家具デザインフェア旭川
 「IFDA」開催委員会設立総会

1990年 国際家具デザインフェア旭川
 「IFDA」創設
 7月 第1回国際家具デザインフェア旭川
 「IFDA」開催
 1992年 「北海道の森を守りたい」と社有林を取得
 し植樹活動を、部社員で開始
 1993年 椅子研究家の織田憲嗣氏が、800脚を
 超える名作椅子とともに北海道へ移住
 することに助力
 1995年12月 旭川家具工業協同組合 理事長 就任
 1997年3月 ㈱インテリアセンター 代表取締役会長 就任
 2003年5月 全国家具工業連合会 会長 就任
 （現 日本家具産業振興会）
 2004年 植樹活動が業界全体の取り組みとなる
 2007年5月 旭川家具工業協同組合 会長 就任
 2008年4月 東海大学芸術工学部 客員教授
 2009年5月 日本家具産業振興会 相談役 就任
 2011年11月 旭川市立北海道ものづくり大学開設を
 目指し、西川将人市長に具体的検討を
 促す要望書を提出
 2013年3月 ㈱カンディハウス 取締役相談役 就任
 2013年5月 旭川家具工業協同組合 相談役 就任

受賞

2013年7月 技能五輪国際大会（ドイツ）
 現地にて応援
 2015年4月 ものづくり分野人材育成を支援する
 長原實・スチウレ・エング人づくり
 基金（愛称 人づくり一本木基金）創設
 2015年10月 永眠（享年80歳）
 1978年 日本インテリアデザイナー協会賞
 1984年 国井喜太郎産業工芸賞
 1994年 北海道産業貢献賞
 2005年 日刊工業新聞社 地域社会貢献者賞
 2005年 日本産業デザイン振興会
 デザインエクセレントカンパニー称号
 2006年 北海道新聞文化賞（経済部門）
 2012年 北海道功労賞



当財団が公益財団法人へ移行後、特定寄附を受け新たな基金を創設し、平成27年度から事業を始めた「人づくり一本本基金」。

本書の発行は、この基金の寄附者である長原實氏（平成27年10月逝去）の生前最後の講演と縁の方々が集った創設記念セミナーの内容が、道内における文化芸術活動等の新たな創造活動の道標として、より多くのみなさんと共有したいということがきっかけになりました。

さらには、文化芸術活動等に対する、道内での寄附文化の醸成への一助となることも期待しています。

最後に、発行に当たり貴重な資料の利用をご快諾いただきました株式会社カンデイハウス、そして平成27年度まちの文化創造事業・ギャラリープログラムとして財団が共催し、9月の講演他を実施、運営した札幌芸術の森事業部並びに「君の椅子」プロジェクト、講師はじめ各種ご協力いただきました皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

公益財団法人北海道文化財団

長原スピリットを語る

発行 平成28年3月

制作 公益財団法人北海道文化財団

〒060・0042

札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル 3F

電話 011・272・0501

FAX 011・272・0400

<http://haf.jp/>

協力 株式会社カンデイハウス

「君の椅子」プロジェクト

札幌芸術の森（公益財団法人札幌市芸術文化財団）

印刷 株式会社須田製版

